

## 旧制小樽市中学校における吉田惟孝校長の教育思想の影響 (2) —伊藤整による吉田惟孝校長評とドルトン・プラン批評を中心として—

松 木 久 子

The influence of Headmaster Tadataka Yoshida's educational thoughts  
at the Otaru Junior High School under the old system-part2  
— On the focuses of opinions about Headmaster Tadataka Yoshida  
and the Dalton Plan written by Sei Ito —

Hisako Matsuki

所属 幼児教育学科 Department of Infant Education

要約：ヘレン・パーカーが考案した「ドルトン・プラン」にいち早く注目した日本人教育者として知られている吉田惟孝が、旧制小樽市中学校の初代校長となり、どのように「ドルトン・プラン」を導入し実践したのかについて、当時同校で教員であった文学者伊藤整の言説をもとに述べ、現在においても教育実践が可能であるかどうかを模索してみたい。

This paper writes about opinions about Headmaster Tadataka Yoshida and the Dalton Plan written by Sei Ito. Sei Ito used to be a coworker at the Otaru Junior High School for three years and only wrote about Yoshida's characters and the Dalton plan. This will also grope for the possibilities and reasons of a failure of tryout of the Dalton Plan.

キーワード：教育思想, ヘレン・パーカー, ドルトン・プラン, 吉田惟孝, 伊藤整  
educational thoughts, Helen Parkhurst, Dalton Plan, Tadataka Yoshida, Sei Ito

## はじめに

吉田惟孝 (1879-1944) は、旧制小樽市中学校 (現在は小樽市立長橋中学校であり、住所は旧制の時代も現在も北海道小樽市長橋 4 丁目 16 - 1 である。) の初代校長を務めた。その期間は、1925 (大正 15) 年から 1932 (昭和 8) 年までであった<sup>1)</sup>。彼は、アメリカの女性教育家ヘレン・パーカー・スト (Helen Parkhurst, 1887-1973) が考案した「ドルトン・プラン (Dalton Plan)」に、いち早く注目し日本に紹介した人物として知られている。なおかつ彼は、欧米海外教育視察の折に、実際に「ドルトン・プラン」が実践されている学校を数校参観したのであった<sup>2)</sup>。米国においては、パーカー・ストが設立した児童大学校 (Children's University School) [この学校は、後に改名してドルトン・スクール (The Dalton School) となり現在も存続している。]<sup>3)</sup> とドルトン高校 (Dalton High School)、英国においては、ロンドン (London) のストレッタム女子中学校 (Streatham County Secondary School) とベダールズ学校 (Bedales School) であった<sup>4)</sup>。吉田惟孝をはじめとして当時の日本の教育関係者たちが「ドルトン・プラン」に注目したのは、歴史学研究の分野で一般に、「大正デモクラシー」<sup>5)</sup> の時代と呼ばれている民主主義の高揚期という時代を背景にして、日本の教育史上でも特徴的な展開をした「大正自由教育」と称される時期である。

吉田惟孝自身、学校生活はデモクラシーに立脚すべきであるとの考えを抱いていた<sup>6)</sup>。彼は、明治期以来の学校教育において主流を占めていた画一的で、硬直した学級一斉教授 (whole class teaching) による単なる知識の詰め込み教育では、多様な個性をもった一人ひとりの生徒に対応するには限界があることをよく把握しており、教育においても多様性を要求される時代の到来を感じていた。パーカー・ストは、長年の教師としての指導の経験を踏まえて「ドルトン・プラン」を考案した経緯があり、学校教育の現状をよく把握していた。彼女は自身の早熟な幼少期から学校教育で体験したことをも踏まえ、既成の学級一斉教授による学校教育のあり方には限界があることを理解してもいた<sup>7)</sup>。パーカー・ストが抱いた既成の教育のあり方に対する鋭い批判的精神は、師範学校に入学する以前に高校卒業と同時に教員資格を取得してしまうということにも現れている<sup>8)</sup>。そして、最初に赴任した農村地帯にあった「単級学校 (one-room schoolhouse)」での教師としての指導経験<sup>9)</sup> が、後の「ドルトン・プラン」へと発展していくきっかけとなったのである。「単級学校」で学んでいたのは、学年も年齢も異なる 40 人からなる生徒たちで、教師はパーカー・スト一人という人的そして物理的な制約がある環境において、生徒たちがある程度の自由 (freedom) を享受しながら、お互いが共同 (Co-operation) し合う柔軟性 (flexibility) に富んだ学習環境を創り出したことである。

パーカー・ストが行った「単級学校」での教育実践は、1915 年にデューイ (John Dewey, 1859-1952) とニューヨーク (New York) で出会い彼の家族とも親しく交流する中で、当時としてはかなり斬新な先取りした教育のあり方であり、デューイが実験学校 (Laboratory School) で似たような教育実践をしていたことを認識するのである<sup>10)</sup>。その証拠に彼女は改めて師範学校に入学し直し、自身が行った教育実践を裏付ける教育理論を模索したのであるが、当時の師範学校での教授内

容をはるかに超えたものであった。先述したように、高校卒業と同時に特別な配慮により、教員資格を取得してしまったパーカーストであり、師範学校で学ぶ内容も通常4年間かけて取得する内容もこれもまた特別の配慮により2年間で取得し、1907年に卒業した師範学校生たちの中で最も専門性に優れた学位を授与されたこと<sup>11)</sup>から判断しても、彼女が類まれな教師としての能力に満ちていたことは想像がつく。そのまま師範学校の指導者になった彼女は、当時のアメリカの女性教師たちの間で話題になっていた、イタリアの女性医師マリア・モンテッソーリ (Maria Montessori, 1870-1952) の教育理論を探究することになる<sup>12)</sup>。しかしながらモンテッソーリとの交流が皮肉にも、パーカースト自身や「ドルトン・プラン」の理解のされ方に多少なりとも誤解を与えることとなったと言える。

先述したように、パーカーストの類まれな教師としての指導力は、モンテッソーリ自身からも認められ弟子 (disciple) のような存在として絶大な信頼を得たのである<sup>13)</sup>。「モンテッソーリ法 (Montessori Method)」のデモンストレーションの教師として、パーカーストはモンテッソーリから抜擢され、アメリカでのモンテッソーリ運動 (Montessori Movement) の監督者に任命され活躍した。ここで注目すべきことは、絶大な信頼をパーカーストに抱きながらも、モンテッソーリはやがてはパーカーストが自分と袂を分かち離れていくことを予測してもいたことである。つまりパーカーストは、あくまで「単級学校」での試みを理論化する必要性から、モンテッソーリの教育理論に興味を示したということが言えるのである。モンテッソーリが自分と同じ資質をパーカーストに見出したということには、教育の新しいあり方を貪欲に模索しようという姿勢にあったのである。なぜならパーカーストは、1914年に行われた第二回国際モンテッソーリ教師養成コース (The Second International Montessori Teachers Training Course) に参加した女性教師たちの中でただ一人、「単級学校」での教育実践の経験があったため、モンテッソーリの教育理論を理解し実践することができたからである。この養成コースには、イギリス出身の女性教師たちが最も多く参加していたことも注目に値する。

結局イギリス出身の女性教師たちは、パーカーストがモンテッソーリの教育理論の忠実な後継者であると理解し、「ドルトン・プラン」を「モンテッソーリ法」の延長線上にある教育理論として理解した、という経緯を宮本健市郎も指摘している<sup>14)</sup>。吉田惟孝は海外視察において、最初に「ドルトン・プラン」が実践されていたイギリスの学校を訪問見学したのである。その後にアメリカに渡り、パーカーストが設立した学校を訪問見学したのであるが、彼が受けた第一印象の強さを考えざるを得ない。本論文では、吉田惟孝がどのような教育実践を行ったのかを明らかにし、失敗に至った要因を模索していく。

## 1. 伊藤整による吉田惟孝校長評

吉田惟孝が小樽市中学校の初代校長を務めていた最初の3年間、1950年代に「チャタレイ裁判」で話題となった文学者の伊藤整(1905-1969)が、新任の英語教師として指導にあたっていたという事実がある<sup>15)</sup>。筆者はこれまで、吉田惟孝や伊藤整に関する資料を収集するために、市立小樽図書館や伊藤整の出身大学である小樽商科大学附属図書館、そして市立小樽文学館等を訪れた。その結果、旧制小樽市中学校に関する資料や、伊藤整をめぐる周辺の資料を入手することはできた。しかしながら、肝心な実際の「ドルトン・プラン」による教育実践に関する資料は、皆無に等しい状況であった。そこで新たな資料を入手できる可能性を胸に、小樽市立長橋中学校を2016(平成28)年6月16日(木)と17日(金)の両日に訪れた。事前に、同中学校に電話にて訪問の可・否に関する問い合わせの連絡を13日(月)にしたところ、現在教頭を務める高橋隆賀先生からご解答いただき、資料室である「温故知新室」の利用を許された。

訪問した両日はちょうど、一学期の期末試験が行われていた。シーンと静まりかえった鉄筋コンクリート造りの校舎の中を、教頭の高橋隆賀先生の誘導により3階の西の端に位置する「温故知新室」に案内され、必要に応じて資料の閲覧や複写そして写真撮影を許された。筆者がそこで目にした資料の概要は、主に社会科の元教諭であった竹田保弘氏が編纂された創成期からの人事関係の書類や履歴書、生徒たちの書いた作文の一部[原本にあたるような古い紙資料も存在していたが、手で触れると脆くも痛んでしまう可能性があるため、容易に頁をめくることができなかったが、大半は竹田保弘氏によって複写された資料のようであった。(ただし、残念ながら内容は「ドルトン・プラン」に関するものではなかった。)]、文房具等の物品に関する納品書等、何期生かは不明であるが生徒たちが写る写真が何枚か、旧木造建築校舎の模型、歴代校長たちの額縁入りの肖像画や写真、卒業生が著した書籍の一部、地元小樽の新聞社「小樽タイムス」や「北海タイムス」そして北海道新聞による長橋中学校に関する記事の切り抜き、創立何周年かを記念して編纂された冊子等であった。「ドルトン・プラン」による教育実践に関する資料は、やはり皆無であった。しかしこのような状況においても、筆者にとって少なからぬ救いとまた興味深い発見は、初代校長の吉田惟孝の時代を先取りしたような教育のあり方の影響を引き継いでいるような内容が記された新聞記事であった。筆者が、新聞記事の切り抜きの内容を確認していたところ、時代を先取りする精神が長橋中学校に至っても継承されている痕跡を確認できたということであった。旧制小樽市中学校の設立自体が、市立中学校としては北海道で初めて設立されたのであり、大正15(1925)年には水泳プールも北海道内だけでなく日本全国からみても非常に珍しいことであったように、いち早く備えられたのである。新聞記事には、北海道内また日本全国からみてもあまり例がなかったようであるが、1950年代半ばに小樽市在住の外国人たちが審査員を務めた英語の弁論大会が開催されたり、1960年代半ばにはLL教室を校内に開設したりしていた様子が記されていた(現在は残念ながら、どちらも存続していないということである)。

いずれにしても、資料上の制約があるのは確かである。それゆえ、小樽市中学校における吉田惟

孝の人物像や「ドルトン・プラン」による教育実践の実態を知る上では、唯一存在していると言ってもよい伊藤整による言説に頼る他ない。先述したように伊藤整が、英語教師として吉田惟孝校長と学校生活をともにしたのは、3年間だけであった。3年間というほんの短い期間であったにもかかわらず、吉田惟孝校長の印象は伊藤整にとってとても強いものであったことが彼の言説から理解できる。伊藤整はその後、文学者として大成したことが物語っているように、中学校の英語教師になることを積極的に望んでいたのではなかった。彼は、現在の小樽商科大学の前身である小樽高等商業学校（小樽高商）に3年間学び、卒業時に小樽市中学校が新設され新任の教員を探していた状況の中で、家計を助ける必要性があったこともあり、たまたま時期と場所の偶然の一致から英語教諭の道を選んだというのが相応しい。

創成期の小樽市中学校の教職員は、吉田惟孝校長をはじめ教頭の梅沢新一郎教諭、伊藤整と同じく新任の藤原啓恵次郎教諭さらに山田書記、そして2人の小使という構成であった<sup>16)</sup>。伊藤整は、生まれ育った小樽の地から少しでも早く離れることを望み、東京での生活を夢見ていたこともあり、現在の一橋大学の前身である東京商科大学への進学のための準備をしていたという事情もあった。新校舎が現在の小樽市立長橋中学校の地に完成してからは、伊藤整は5日に一度回ってくる宿直を頻繁に引き受けており、ある時期からは中学校の小使室に寝泊りしていた様子が資料から窺える<sup>17)</sup>。小樽の隣町の塩谷に伊藤整の実家があり、最初はそこから通勤していたのであったが、やがて通い切れなくなり小樽に下宿するようになった。昼間は小樽市中学校に勤務し、将来の東京での生活に備えるために少しでもお金を貯める目的で、夜間は稲穂小学校に補修学校が開設されたためそこでも指導し、さらに小樽に在住する外国人に日本語を教えたりもしたからである。このような状況から判断すると伊藤整にすると、片手間というか人生の次のステップアップのために、中学校の英語教諭として指導にあたっていたとすることができる。事実、小樽市中学校の教員を引き受けたのはその給料の高さにあった<sup>18)</sup>、と伊藤整も述べている。彼の言説からは、自身が学ぶ側の生徒や学生のとときから、もともと教師という職業自体を胡散臭く感じていることが見受けられ、それゆえ教師という職業を客観視できる余裕があったと考えられるが、同時に自分自身を蔑むような感じを読み取ることができる。

伊藤整の内心には、学校教育や教師に対するある種の屈折した気持ちが渦巻いていたのであるが、吉田惟孝校長に対する尊敬の念は初めて対面したときから抱かれ、吉田惟孝の教育者としての力量や眼力に圧倒された面が窺える<sup>19)</sup>。吉田惟孝は、熊本県立第一高等女学校を辞任して、日本列島の南端から北端の北海道小樽という地に赴任する理由が、ドルトン・プランの理論家ということから理想教育を実現し得る場所として選んだ<sup>20)</sup>、と伊藤整も考えていた。それは熊本県という保守的な地で、当時としては斬新な教育を女学校において展開したことへの反発から逃れ、北海道という進歩的な気風のある所で、新しい試みに対して好意的である土地柄に期待したということにある。しかしながら、伊藤整自身をはじめとして他の教職員たちは、ドルトン・プランが何であるのかは全く知らないという状況であった。吉田惟孝は、彼が理想とする教育を実現させるべく、靴底を磨り減らして修理せざるを得ないくらいに、小樽中の生徒たちの家々をまわり当時中学校段階で



は行っていなかった家庭訪問を実施し、すべての生徒たちの家庭環境を含めて生徒理解に努めていたことに伊藤整は感心している。こうした吉田惟孝校長の行動は、従来の教育のあり方とは異なった教育実践である「ドルトン・プラン」を実践することへの、生徒たちだけではなく保護者たちからの理解を得るための足固めであったであろうし、生徒一人ひとりを深く理解しようという考えであったであろう。吉田惟孝校長は、家庭訪問をして得られた生徒一人ひとりの情報を、昼食時に伊藤整をはじめ他の教職員たちと共有しあった。

吉田惟孝が、小樽市中学校で新任の校長として教育活動を開始したときは、小樽市内の稲穂小学校（稲穂尋常小学校や稲穂男子小学校などの記載もあり）に間借りしていたため、新校舎が完成した10月から本格的な教育活動が開始された<sup>21)</sup>。最初から「ドルトン・プラン」が導入されたのではなく、1年間は既成の学級一斉教授によって授業が展開された。しかしいつの時代においても、学級一斉教授においては同じ授業内容でも、生徒一人ひとりの理解度や個人差の問題はどうしても避けて通ることはできない。吉田惟孝校長も小樽中の生徒たちの家を訪問し、街中の人びととのいろいろな交流を通じて、新生中学校での活動を理解してもらう目的もあったであろう。いくら北海道という他の地に比べれば、当時としては進歩的な気風があり、新しい試みに対して多少は好意的だとしても、殊に自分の子どもの教育となると話は異なり、保護者は非常に保守的な考え方や態度をとるのは現代においても同様であろう。それだけ、「ドルトン・プラン」による教育実践は、学校のあり方を従来のものとは異なるかなり斬新なものに変える可能性をもっていたのであった。

結局、伊藤整が本格的に「ドルトン・プラン」による本格的な教育実践に関わったのは、わずか半年間というものであった。彼はすでに東京商科大学の試験に合格しており、昭和3（1928）年3月31日付けで退職するまで、家庭の事情から中学校教諭の退職を1年間延ばしていた。「ドルトン・プラン」による教育実践は、昭和2（1927）年9月から準備期間を含め開始された。伊藤整をはじめとして他の教職員たちも「ドルトン・プラン」について全く知らなかったように、特に教頭の梅沢新一郎教諭にとっては、吉田惟孝校長の考え方が飲み込めず不満らしく浮かぬ顔をしていた<sup>22)</sup>、と伊藤整は述べている。彼はまた、梅沢教頭について気骨のある律儀で勤勉な教師として評価もしているが、従来の一般的な中学教育の形式的な方法を好んでいるという鋭い指摘もしている。モンテッソーリ教師養成コースに参加した多くの女性教師たちの中においても、これまでのあり方とは異なる新しい教育実践をパーカーストだけが行うことができたと言ったように、「ドルトン・プラン」の実践可能性はすべての教師たちに関わっていると言っても過言ではない。パーカーストが設立した児童大学校においてさえも、新しく採用された教師たちは「ドルトン・プラン」を実践できるように、パーカーストによって再教育される必要があったという事実があるのである<sup>23)</sup>。従来どおりの学校一斉教授という教育を受けてきた教師たちが、学校のあり方を全く異なるものに変えてしまう「ドルトン・プラン」を実践するには、かなりの困難があったことは事実であり、それゆえ多くの学校がことごとく教育実践の失敗に陥ったことも容易に想像できる。小樽市中学校における「ドルトン・プラン」による教育実践が、どのように展開されたのかを次に述べたい。

## 2. 小樽市中学校における「ドルトン・プラン」の実践

「ドルトン・プラン」は、アメリカの民主主義を支え新しく出現してくる社会に主体的に対応できる人間の育成という目的で、ヘレン・パーカーが考案した。学校が、民主主義の将来を担う子どもたちにとっての態度形成の場となるように、学校を社会化するために第一原理を「自由」とし第二原理を「共同」、適切にいい直すならば集団生活の交流であるとする。パーカー自身が述べているように、「ドルトン・プラン」は決して完全なものではない<sup>24)</sup>。興味深いことは、従うべきシステムや方法もなく、教える必要はないカリキュラムというものも何も決定されていないことである。つまり、各学校の実情に応じていくらかでも「自由」に、子どもたちや教師たちの「共同」によって改変や修正しなおすことが可能であるということである。パーカーは「単級学校」での体験を念頭に置きながら、子どもたちや教師たちの「自由」な発想によって、学校の状況 (school conditions) について話し合いを通じ「共同」して変えていきながら、改変や修正作業に誰もが主体的に参加し自分でできることは責任 (responsibility) をもってやり遂げ、自分自身を律することが出来る自立した態度形成が可能になると考えていた<sup>25)</sup>。吉田惟孝も、パーカーのこのような考え方に賛同したのである。しかしながら、パーカーがその著書で解説するように「ドルトン・プラン」を実践することは、必ずしも容易なことではなかった。なぜなら、タイヤック (David Tyack) とキューバン (Larry Cuban) が述べているように、パーカーが考案した「ドルトン・プラン」は、既成の学校教育のあり方を根本から変えてしまう可能性があり、学校が「生き生きとした本当の学校 (a 'real school')」となるためには、教育委員会や保護者そして教育者さらに生徒が抱えている従来の学校文化を、すっかり変化させることを要求していた<sup>26)</sup>と言えるからである。結局、「ドルトン・プラン」を実践し得た学校は、パーカー自身が設立した児童大大学校のみであり、その学校は現在に至っても存続し、学校を支える理念として「ドルトン・プラン」が生き続けている。

従来の学校のあり方を根本的に変えてしまうという意味で言えば、パーカーは「ドルトン・プラン」を当初から、「ドルトン実験室案 (The Dalton Laboratory Plan)」と呼び続けており、殊に「実験室」ということを強調していた。吉田惟孝は確かに、パーカーが設立した児童大大学校も訪問見学したのであったが、最初に訪問見学したのはイギリスにおける「ドルトン・プラン」の典型的なモデル校と考えられていた学校であった。イギリスにおける「ドルトン・プラン」解釈は、先述したように「モンテッソーリ法」の延長線上の教育理論と理解されたという経緯があるため、生徒たちに各教科内容を正しく伝達する方法と解釈したため、教育の個別化や自学自習の方法として教育実践が行われた。ここで注目すべきことは、イギリスで実践されていた「ドルトン・プラン」は、パーカーが意図していたような「学校の社会化」や「協力的コミュニティ」とは全く異なっていたことである。パーカーは長年の教師としての指導の経験から、子どもの学びが機械的なものになることを危惧していたのである。子どもが一人で学習するのであれば、何のために学校で学ぶ必要があるのかということをパーカーは絶えず指摘している<sup>27)</sup>。それゆえパーカーが、

モンテッソーリに弟子のような存在と信頼されたとは言え、子どもたちの活動を完全に個別化してしまうモンテッソーリの教育理論には、どうしても賛同できなかったのである。パーカーストは結局、「単級学校」での教育実践で実現された「共同」する空間として学校を捉えていたものであり、「共同」する状況を創り出すことが「ドルトン・プラン」の真髄であると解釈できる。

吉田惟孝は、イギリスでの学校における教育実践の第一印象に、非常に強く影響されたと言える。当時の日本の教育におけるさまざまな制約を考えれば、吉田惟孝が理想とする教育を本当の意味で実践するには、あまりにも制限が多かったと考えられる。吉田惟孝だけではなく日本の当時の他の教育者たちも同様に、心意気や精神性においてはパーカーストと同様のことを考えていたことは確かである。当初、吉田惟孝の考えをなかなか理解し得なかった教頭の梅沢新一郎教諭も、吉田惟孝校長が実践したいと思っている教育内容に理解を示し、吉田惟孝の意見が最も素晴らしいものであるとの認識に至るようになっていった。小樽市中学校における「ドルトン・プラン」とは、対象が第一期生の二年生に対してのものであった。五十人ずつ二組に分けていた二年生を、三十人ずつの三組に分け、最も出来る子をA組に、普通の子をB組に、出来の悪い子をC組にという、現在で言えば学力（能力）別クラスによって指導をするというものであった<sup>28)</sup>。小樽市中学校に入学する生徒は、入学試験に合格したものが毎年100人ほど入学したのであり、他の中学校入学者数に比べれば理想的過ぎるほどの少人数であった。しかしながら授業が進められていくにつれ、やはり個人差というものはどの教育現場にも付きまとうことになるが、クラス内に学力差のある生徒たちが同席することで、学習内容の理解のされ方が平等性に欠くという意識が働くことも否めない。ABCと3クラスに分けられ、C組には教科書の内容を普通よりも緩慢に繰り返して教えていき、B組には教科書をその学年で終わらせる普通の速度で指導し、A組はそのほかに課外の授業をして出来るだけその学力を高めていく、というやり方をした。

パーカーストも各学校の実情に合わせて、「ドルトン・プラン」を改変して教育実践を行うことを勧めているのであるが、吉田惟孝の「ドルトン・プラン」理解は、イギリスでの教育実践に近いことが窺える。つまり、各教科内容を正しく伝達する方法と解釈した、ということである。確かに当時は、文部省から厳しく教える内容が規定され、教科書も所定のものを使用しなければならないという制約があり、男子の中学校ともなればその後の進路や進学を考えざるを得ず、進学のための受験という縛りも加味される。伊藤整自身も、ドルトン・プランなるものが一種の秀才教育であることを理解した<sup>29)</sup>、と述べているごとくである。やはり吉田惟孝も、「共同」する「学校の状況」を創り出し得なかったのである。伊藤整は鋭い観察力で、ドルトン・プランが失敗に終わった要因を言い得ており、教師に対する負担がかなり増加するという点にある。それは時間的にも授業時間が増え、出来の悪い子に対しては内容の説明を今まで以上に丁寧にすることや、出来る子に対しては内容充実のためのさらなる教材準備が必要となるということである。従来の学級一斉教授の教育を受け、それに慣れ親しんでいる教師たちにとってみれば、「ドルトン・プラン」の実践は確かに教え方や教える内容に変化を必要とするものであり、そうしたことに慣れていない教師たちにすれば、かえって教育の理想とはかけ離れたものとなり得るのである。



吉田惟孝校長は、父兄会を開いて丁寧に説明することを教職員に伝え、教職員たちは教頭をはじめ校長への尊敬が絶大なものであったため、特に反対という意見はなかった。今までとは異なった教育のあり方を実施することに対する父兄たちの反応には、複雑なものがあったであろう。現代においても、「ドルトン・プラン」が突きつける課題は教育において永遠の課題と言えようが、一人ひとりの人間の能力は生まれながらにして異なるものであり、学校や学級において一人ひとりが生き生きと過ごすためにはどうすべきかといった問題であろう。「ドルトン・プラン」をはじめ他の新教育理論が突きつける問題は、現代においても決して解決されていないことを思うと、非常に根深い根本的な問題を含んでいることがよく理解できる。「ドルトン・プラン」による教育の実現は、決して過去の問題ではなく、現代にもつながる重要な課題を含んでいることは確かであると言える。

## おわりに

吉田惟孝校長によって推進された「ドルトン・プラン」による教育実践であるが、いつまで続けられたのか、つまり彼が学校を退職した昭和8(1932)年まで続いたのかどうかは、文献や資料によって調べようがない以上、ここでは明確に言及することはできない。しかしながら、吉田惟孝のみが「ドルトン・プラン」について多少詳しく知っていて、他の教職員たちは全く何のことかわからない状況であっても、彼の校長としてのまたは教育者としての信念や情熱は、他の教職員たちに伝わり尊敬を集め絶対的な信頼を得ていた。詳しく解らないながらも手探り状態で、教職員たちの「共同」により「ドルトン・プラン」による教育実践は小樽市中学校でなされた。確かに従来の教育指導とは全く異なる状況に、教育現場は大いに混乱したことは想像できる。事実、パーカーストが設立した児童大学校においても、あまりにも既成の学習環境とは異なることへの不満や不安の声が挙がったのである<sup>30)</sup>。ここで注目すべきことは、パーカーストの教師としての類まれな能力である。彼女は、子どもたちや教師たちがあげる声に耳を傾け、お互いに「共同」しながら従来とは異なる「学校の状況」を創り出し、そこに「ドルトン・プラン」の真髄があると考えていた。パーカーストが、「システムでもなく方法でもなくカリキュラムでもない」と「ドルトン・プラン」を説明する<sup>31)</sup>ように、何事も固定化しないことこそが、「学校の状況」を常に生き生きしたものにするということを意味していると考えられる。「ドルトン・プラン」のもつ魅力は、今日においても教育改革を考える上で、決して衰えてはいないと思われるのである。

## 注

- 1) 岩崎彰代志著、『大正自由教育 ドルトン・プラン 吉田惟孝』、発行者岩崎彰代志、一九九六年五月十日、156 頁
- 2) 吉良僕著、『大正自由教育とドルトン・プラン』、福村出版株式会社、1985 年 12 月 20 日初版発行、第二章

- 3) Semel, Susan F., *THE DALTON SCHOOL: The Transformation of a Progressive School* (New York: Peter Lang Publishing, 1992) , p.19 1920年に学校名が改名されたという記述がセメルによってなされているが、はっきりとどの資料によってという裏付けはなされていない。筆者はドルトン・スクールを1998年2月25日から27日にかけて訪れ、校舎の最上階の8階にある図書館の一角で、学校側の許可を得て所有している資料を調べたところ、はっきりと1920年に学校名を改名したという資料は存在していなかった。むしろ、1928年までパーカーストが使用していた手紙やその他の用紙が資料として残されているが、すべて児童大学校の名前入りのものであった。そして、校舎の移転が行われた1929年以降は、すべての資料がドルトン・スクールの名前入りになっていた。こうしたことから筆者は、1929年をもって正式にドルトン・スクールと改名したと判断したい。
- 4) 吉田惟孝著、『最も新しい自学の試み ダルトン式教育の研究』、厚生閣、大正十一年十月十五日、6頁〔なお原文は、次のとおりである。ダルトン式教育を実施して居る学校で、私の参観したのは米国ではパークハースト嬢の経営して居る児童大学校とダルトン中学校（校長はアーネスト・ジャックマン氏）、英国では此の方案を最も大規模に実践して居る倫敦市立ストレッタム女子中学校である。英国ハンプシャー州ピータースフィールド町にあるベデールズ学校は、親しくパークハースト嬢の指導を受けて此の方案を実施して居るので、同校校長バッドレー氏に乞うて、同氏の意見と経験の結果を記録した報告書と、学習上に使用して居るカード及び其の説明を貰った。〕ダルトン、パークハーストという記載については、そのまま原文を尊重し使用する。またストレッタムについては、ストリーザムという表記も用いられている。〔宮本健市郎著、『アメリカ新教育運動における個別化・個性化の教育実践と個性概念の変容』（課題番号：10610255）平成10年度—平成12年度科学研究費補助金 基礎研究（C）（2）研究成果報告書、平成13年3月15日発行、81頁〕
- 5) 中野光著、『改定増補 大正デモクラシーと教育 —1920年代の教育』、新評論、1990年、1頁から2頁
- 6) 吉田惟孝著、「ダルトン式教育に対する私見」、帝国教育会編、『ダルトン案の批判的研究』、文化書房、大正十二年三月、233頁から238頁
- 7) Pinkowski, Vern., *Helen Parkhurst: Educator* (Unpublished Research Paper, A Vern Pinkowski Research, 1999) , p.20
- 8) Voices: Dalton's Oral History Project, "Memories of Helen Parkhurst" in *Dalton Connections 1919-1994 Dalton Celebrates Seventy-Five Years* (New York: The Dalton School Archives, n.d.) , p.11
- 9) Parkhurst, Helen., *Education on the Dalton Plan* (New York: E. P. Dutton & Company, 1922) , p.9, ヘレン・パーカースト著、赤井米吉訳、中野光編、世界教育学選集 80『ドルトン・プランの教育』、明治図書、1974年、21頁（以下、邦訳として省略して表記）〔パーカーストが最初に指導した単級学校の名称は、ブラック・スクール（The Black School）であること、しか

しながら名称から誤解してならないのは、決して黒人の生徒たちが通う学校ではなく、全員、白人であったということである。そしてこの名称は、単級学校の敷地を提供した人の名前に因んで付けられた。またパーカーズの著書において、生徒数が40人と記されているが、彼女が最初に手にした名簿には45名の生徒の名前が記載されていた。おそらく実際の授業に出席していた人数が、40人であったと判断するのが妥当であろう。彼女の著書にもあるように、パーカーズよりも年上の生徒も学んでおり、卒業せずに（あるいはできずに）在籍したままの生徒の名前がそのまま記載されていたと考えられる。こうした事実は、筆者が2000年3月にパーカーズに関する資料が保管されているウィスコンシン州立大学スティーブンス・ポイント校図書館の記録文書保管所（Room 506: Nelis R. Kampenga University Archives in University Library Center for Learning Resources, The University of Wisconsin at Stevens Point）において入手した、ピンコウスキの資料により明らかとなった（Pinkowski, op. cit., pp.33-37）。]

- 10) Voices, op.cit., p.11
- 11) Semel, op. cit., p.19
- 12) Lager, Diana., *Helen Parkhurst and the Dalton Plan: The Life and Work of an American Educator* (Unpublished Ph.D. dissertation, The University of Connecticut, 1983) , Chapter VI
- 13) Ibid., Chapter VII & VIII, リタ・クレマー著、平井久監訳、三谷嘉明・佐藤敬子・村瀬亜里訳、『マリア・モンテッソーリ ―子どもへの愛と生涯』、新曜社、1981年、10章
- 14) 宮本健市郎著、前掲論文、86頁
- 15) 伊藤整著、『若い詩人の肖像』、新潮社、昭和三十一年八月三十一日発行、竹田保弘著、「伊藤整と長橋中学校」、竹田保弘編纂、「伊藤整 関係資料」、「旧・小樽市中学校 当直通知著簿とその周辺 旧職員・伊藤整の三十三回忌に寄せて」、「旧小樽市中学校 創立期の人びととその周辺」、市立小樽図書館蔵 [竹田保弘氏による資料は、いずれも市立小樽図書館に所蔵されている。どの資料も、いつ編纂し著されたかという明確な日時は記されていない。編纂作業にあたった竹田保弘氏は、かつて小樽市立長橋中学校の社会科の教諭であった。1970年に始まった旧校舎の改築工事を前に、取り壊しを予定されていた旧図書室の屋根裏の整理にあたっていたところ、一期生の生徒の作文や創立当時の職員の履歴書、人事関係の記録などを発見し、その中に伊藤整の名前があったことから、これらの資料の一部を複写、補完していたということである。1994（平成6）年に退職してから、「旧制小樽市中学校の始まりを知る上で貴重な資料をまとめた形で残そう」という思いから資料を整理したということである。北海道新聞 1995（平成7）年10月12日の記事より。]
- 16) 竹田保弘著、「伊藤整と長橋中学校」
- 17) 竹田保弘著、「旧・小樽市中学校 当直通知著簿とその周辺 旧職員・伊藤整の三十三回忌に寄せて」
- 18) 伊藤整著、前掲書、137頁から138頁

- 19) 前掲書、145 頁から 150 頁
- 20) 前掲書、149 頁
- 21) 竹田保弘著、「伊藤整と長橋中学校」
- 22) 伊藤整著、前掲書、150 頁
- 23) Semel, op. cit., p.47
- 24) Parkhurst, op. cit., pp.18-19, 邦訳、39 頁
- 25) Ibid., pp.20-21, 邦訳、29 頁
- 26) Tyack, David. And Cuban, Larry., *TINKERING TOWARD UTOPIA: A Century of Public School Reform* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1995) , p.9
- 27) 加藤直司・赤坂清七訳、『ヘレン・パーカーズト講演：ダルトン教育案』、大阪毎日新聞、大正十三年六月、39 頁から 40 頁
- 28) 伊藤整著、前掲書、243 頁
- 29) 前掲書、244 頁
- 30) Semel, op. cit., p.27
- 31) Parkhurst, op. cit., p.34, 邦訳、39 頁, The Dalton School Archives (筆者手持ち資料)